

マルクス主義を考える

交流合宿

講演録

「読書と私」 原 一美 1

(フォトニュースひろば編集長)

「団結とか、共同行動とかについて」 物江克男 17

(つぶせ！刑法・監獄法改悪 反彈圧大阪連絡会議)

「いま何が求められているのか、私の問題意識」 上坂喜美 34

(三里塚闘争に連帯する会)

発刊にあたって

このパンフレットは、今年の始めに私達が開催した合宿での講演の記録です。

共産主義運動が世界でも日本でも大きな転機を迎えており、一方で私達の周りではこれまでの運動と切れたところから多くの新しい人々が帝国主義に対する闘いに立ち上がっています。

そして「今までどおりのやり方では駄目だ」「マルクス主義ではやれないのではないか」など、様々な議論が起こっています。

しかしマルクス主義は駄目だと言えるほど私達はマルクス主義を正しく実践してきたのだろうか。マルクス主義——共産主義を離れて私達に、新しく運動に参加してくる人々に

提案できるものがあるだろうか。そう考えて私達はこの合宿を企画しました。

講師は、日ごろ私達と共に闘っておられる身近な先輩たちにお願ひし、今、現に日本にあつて活動している共産主義運動の思想について考え、議論することを主題にしました。

このパンフレットをもって、今、日本の共産主義運動の未来をめぐってたたかわされている議論の一面に参加できれば、と願っています。

最後に収録の関係で講演の内容については私達の責任において割愛、要約がされていることをお断りしておきます。

1 いかにかに理論を学ぶか

① 社会学に加盟して

私が大学に入ったのは一九六四年です。当時ベトナム闘争が始まっており、翌年が日韓条約が批准された年で、反戦闘争の時代でした。その年の七月に共産主義者同盟（プリント）の学生組織である社会主義学生同盟（社会学）に加盟しましたが、その秋、教養部の活動の中心であった者を集めて、社会学同京大支部教養班執行委員会の内部研究会がもたれまして、レーニンの「なにをなすべきか」をテキストに、週一回、一章づつ、五人でやりました。

そのころの学生運動は、朝七時半からピラマキはじめ、二時間授業の始め三〇分ほど演説をし、三時から集会をやって、夜は自治委員のオルグとかがある。当時、教養部自治会はプリントと中核と第四インターの三派連合が執行部を握っており、私はその主流派活動者会議の組織担当のキャップだったから、オルグの集約して解散すると九時、十時なんですね。それから社会学同の会議をやって寝るのが一時か一時半。そして翌日の朝、七時十五分ぐらいに蹴飛ばされて起こされる。そんな生活を毎日繰り返

読書と私

——原 一 羊大

（フォトニュースひろば編集長）

はじめに

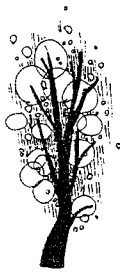
もともと関西から、「読書と私」というテーマで話してはどうかという電話があつて、しかも、マルクス主義の本をあまり読んでいない若い人に対してということでした。注文としては一番難しいことで、どうしようかと考えたんですが、やってみよう。

そしたら、物江さんと上坂さんから私の案に対する回答みたいのが出まして、物江さんのは「団結とか共同闘争とかについて」という赤軍派の総括にあたるもので、上坂さんのは「どうするのか」というテーマだったんですね。これではどうも私の演題だけが整合性に欠ける。何を話したらいいかと今日来るまで考えてきたのですが、当初注文されたのに沿って話そうと思います。

返してたんで、本を読む時間というのはあまりなかったですね。

そんな中で、週一回の『なにをなすべきか』の研究会には、自分がレポーターになったときは、さすがに読んでレジュメを作りましたけれども、他の時は一度目を通すのもあやしく、読まないで行なったこともありました。他の人はよく読んでいて、レーニン全集から引用してレジュメを作ってくるわけですね。それが私のすごく大きなコンプレックスとなって、それがとれるのに、四回生、六七年の一〇・八羽田闘争の時ぐらいいまでかかりました。

結局、私といっしょに社会学同の執行委員として一回生でやっていたのが皆やめて、私一人が残ってキャップになったわけですが、それがどういことだったのか、ここから話してみたいと思います。



『帝國主義論』も最初に結論が書いてあって、それに就いてデータで証明していく、それもうんと入りにくい文章で。日本語訳が悪いという問題もあるわけですが。

『なにをなすべきか』も今から考えれば、あまり一回生の秋で取り扱うような本ではなかったように思うんです。ただ、そういう本が与えられた時には、何度も読んでみる。わからなかったら一応それは保留して、わからないことはノートしてみても、またある時間がたって読んでみようと思つたら読む。これが重要だと思えます。私は六回生の時、六九年の六月一日にプリントを脱盟しました。そして、七〇年二月に運動を再開します。そのころやと『なにをなすべきか』が何を言わんとしているか、わかるようになった気がするんです。本当に革命運動の組織をどうつくっていくか考えるときに必要な本だった。それを最初に与えられて、ある意味で無理がずいぶんあるんですが、自分がいつか読んでみようと思つてあげれば、指定文献―古典は、それはそれで重要な意味があると思うんです。

② 本を読んでわからなかったら

私は入学直後に京大生協組織部に入って、五月に『ドイツイデオロギー』と『国家と革命』のレポートがされる生協の全関西合宿に参加しました。七月には、文学部のクラスで私が作った三十人ぐらいのフラクションの合宿で『帝國主義論』を読みました。

そういう読んだ本が自分とどう結びつくかというところ、けっこうあぶなかった。七月には社会学同に加盟したと言いましたが、社会学同の加盟書には「世界革命」「暴力革命」「プロレタリア独裁」の三つを承認して入ると書いてありました。私なんかあんまりそれが、すっきりして入ったわけではなかったですね。当時、「暴力行為等処罰二関スル法律」の改悪反対闘争をめぐって共産党と新左翼の論争になったわけですが、その中で新左翼の中心であった社会学同に好感が持てたから入っただけのことなんです。好感や直感には理論的な根拠があるのはもちろんですが、それがまだ理論的に整理されたわけではありませんでした。

本を読んでわからないってことはよくあると思うんです。私に最初に与えられた『国家と革命』という本は論証のしかたが私の肌合わないという第一印象でした。

③ 運動との関係で読む

もう一つは、さきほど私といっしょに社会学同で中心になってやってたのが皆いなくなったと言いましたが、彼らの読書のしかたに問題があったと思うんです。当時、社会学同は教養部に四十人あまりいて、そのうち執行委員が五人でしたが、さっき言ったような生活を毎日やってたのは結局、私一人でした。

例えば、下宿オルグというのをやりました。自治委員会とか代議員大会で勝つためのオルグです。私が行くと必ず下宿に相手がいて会えるんですが、他の人からは「会えなかった」という報告が入っていた。私なんか一・二回生のうちは信じていたんですね。三回生になってわかりましたが、実際は行ってなかった。結局その間が喫茶店で本を読んでいる時間だったんです。

私はさっきの生活の中で確かに本を読む時間は少なかったけれども、オルグの時は運動を続けるかどうかで必死になって議論する事になり、これが問題をはっきりさせるのになんと役にたちました。つまり、一つ一つの命題について考え方を整理し、判断を下すことを要求されるわけです。しかし、彼らは読まない運動ができなかったんでしょうけれど、よく読んでましたね。すると、

マルクス、レーニンの古典には先行する膨大な諸分野での論争があるわけで、彼らはその論争について判断を下さないうちは活動できないというふうになっていきま

た。
二回生の時、一九六五年は共産主義者同盟の学生対策部の中心メンバーがいなくなり、瓦解した関西ブントの混迷期であり、翌年三派全学連が建設されるという激動期に向かう時で、一人一人に自分がどうやっていくのかわれませんでした。その時、現実の運動の中から自分の意見をつくらず、なにか観念的に共産主義運動の一人の革命家、専従になるという形ですと考え込んでいた人には運動の継続は無理だったんじゃないか。やはり、運動の中で自分が、これは最低正しいと言える”と、運動との関係で本を読むほうが良かったと思うんです。

一回生の冬休み明けに『資本論』の読み合わせの学習会を文学部の学部の人がやってくれて、私も出ました。私が読み上げたのは実に八二年獄中でした。それを一回生で運動に入る時で読める人もいますよね。それはいいんですが、『資本論』を読むとたくさん本が出てきます。農学から工学から全ての議論が引用され、わかんないと、みんな勉強しないと運動ができない、行動しない、

2 社会学同の指定、

白習、推薦文献

社会学同の指定文献は『国家と革命』、『帝国主義論』、『なにをなすべきか』の三つで、白習文献としては『共産党宣言』、『賃労働と資本』、『ドイツイデオロギー』の三つでした。それとは別に、おのおの当時の先輩たちがいいと思う本を洪水のように推薦文献として与えていました。

当時の社会学同にはさっき話した『なにをなすべきか』の学習会ぐらいしかなくて、全く学習組織はありませんでした。おのおの自分一人で好きに読んでいました。良さとしては、当時の共産主義運動の全ての傾向を反映する文献が党に入ってきたから、情報としてはたくさん集まったことです。その半面、全く無指導で読んでるわけですから、何か質問したくても答えてくれなくて、自分で考えるしかなかったわけですね。

当時、ブントに対立して中核派がありましたね。中核派にはマルクス研究会というのがあって、黒田寛一の『プロレタリアの人間の論理』などをテキストにして一回三、四時間、輪読してレポートを出してやってたんで

ということになった時に事が止まる。『資本論』とか名著といわれる古典を読んでわかんなかったら、なにか自分にふれるものがある時までおいとくのも一つのやり方だと思っんです。

④ 思いつきと理論

反原発運動とかなんでも、これについてこうと思うと、書いてみるといいのがあると思うんですね。一行でも二行でもいい。長くてもかまわないけど、それを書いていって、自分が本を読んでそれと関係があると思うのが出てくるまで待つ。それによって、だんだん理論―教条と自分の思い付きというか、ひらめきが結びついていく。それが読書でけっこう重要な問題ではないかと思っいます。



す。『プロレタリアの人間の論理』は、マルクスが『ドイツ・イデオロギー』から『資本論』で打ち出した唯物史観への反対論ですから、そういう哲学的基礎で洗脳するわけですね。あそこはいいいいいと、当時私なんかうらやましく思ったが、フォイエルバッハ主義にもどそうという中核派の反動的哲学を注入される事になるわけです。今になつては、確かに苦勞はしたけれども、社会学同の小ブルジョア的な自由主義だったかもしれないけれども、マルクス、レーニンのたどった思想的経緯を雑念を持たずに追うことができたわけで社会学同の思想的カオスの中にいたのは幸運だった。

それと、いつも私が読書計画の参考にしたものに、一つは大月書店の国民文庫がありますね。奥付の裏に、学習文献としてマルクス主義の一番重要な文献が載ってるんですね。この指定文献表は、日本共産党が長い歴史と伝統の中で築いてきたもので、現在の日共の評価はさておいて役にたつものです。

私がどんな本から影響を受けたのか、最初に読んだ時ではなくて、自分が読んでハッとした時という事で、年次にそって話してみたいと思います。

〔六四年 『共産党宣言』 マルクス・エンゲルス〕

社学同というのは一回生で本当に大学をやめて、革命家として生きていくことを観念的に要求する組織でして、七月、夏休みで家に一週間帰った時、秋から本当にやっていくかどうかでジリジリしてたんですね。共産主義について、プロレタリアートが自分で権力を奪取できるものなのか、なぜプロレタリアートが被抑圧階級でありながら革命をやるのか、疑問を持って帰りましたので、『共産党宣言』を必死で読みました。私はそのあと、講師になって七回ぐらいこの本の学習会をやった事になりますが、今にいたるまで『共産党宣言』という本は私にはずいぶんわからないことが多いのです。ただ、「労働者の解放は労働者階級自身の事業でなければならぬ」など、珠玉のくだりがあったって運動を継続してきました。私が最初に読んだ本として重要です。

〔六七年 『ドイツ・イデオロギー』

マルクス・エンゲルス〕

本当になぜ、プロレタリアートが被抑圧階級でありながら支配階級たりえるのか、なぜ資本主義社会で階級社会が終わるのかについて、学生で観念的であったという問題もあるんでしょうが、考える時に示唆を与えてくれたのが『ドイツ・イデオロギー』の認識論ですね。

廣松渉さんはエンゲルスの著作だという意見なんです。一般的にはマルクス、エンゲルスの共著だということになっていきます。私が入学した頃はアデラツキー版といいまして、アデラツキーという人が「自分はこういう叙述が正しいと考える」ということで、草稿をバラしてつくった本で学習会をやりました。それがためによくわかんなかったですね。そしたら六六年、私が三回生の時に合同出版から、花崎翠平さんの訳でもとものエンゲルスが書いた草稿どうりで出版されました。それを読んできると、どういうぐあいにマルクス主義が開始されたのか考えさせられました。六七年一〇・八闘争の年ですが、この本を読んでマルクス主義をいきいきとしたものを感じる事ができました。

〔七〇年 『認識論』 藤本進治 〕

さきほど言いましたように、第二次ブントの党内闘争が六八年の秋からありまして、六九年に脱盟し、どこからやり直そうかと思っただけで、藤本進治の『認識論』でした。これは青木書店から出たんですが、その一章と二章にはソ連の理科学系の学者たちの知識を総合して認識とその発展とが書かれていました。ブルジョア社会のつくりだした労働が、労働者階級が世の中をひっくり返すということを本当に考えるようになったのは『認識論』を読んだからです。

〔七〇年 『帝国主義と民族植民地問題』 レーニン〕

私は七〇年の二月に運動を再開するんですが、それまでは誰か先輩がいて、誰かの指導を頼りにしてやってきたわけです。今度は自分一人でした。その時を前後してぶつかったのが『帝国主義と民族植民地問題』です。

「第一に、われわれのテーゼのもっとも重要な、基本的な考えかたはなにか？ それは、被抑圧民族と抑圧民族とのあいだの区別である」これにはびっくりしましたね。

当時、ベトナム闘争で中核派が代理戦争論を唱えて、「ベトナム戦争はスターリニストと帝国主義者との代理

戦争である」、「アメリカのいろいろな政権とベトコンに反対してベトナムの人民を支援する」と言っていました。しかし、その人民というのは、実際はベトナム共産党の指導下にあった南ベトナム民族解放戦線のことです。中核派は、六九年から七〇年にはついに沈黙して代理戦争と言わなくなるのですが、ブントは当初から、言い方としては良くなかったと思うんですけども、「ベトコン支持」と極論して、ベトナム民族自決権を支持していました。「ベトコン」というのはアメリカが使っていた蔑称です。

この論争の中に、今私たちも往々にしてそうですが、立場をわきまえないという問題があるとおもいます。

クループスカヤが自伝でお父さんのはなしを書いています。クループスカヤは没落した貴族の娘なんです。ある時期知り合いの地主の別荘で生活してて、そこにお父さんが迎えに来て馬車に乗って帰ろうとしたところ、農民たちから襲撃を受けて殺されそうになったんですね。クループスカヤのお父さんはロシア共産党の前のナロードニキ運動の支持者だったんですが、その時「農民に殺されそうになるのはやむをえない」、「こういうことがおきるのは地主に責任がある」と言うんです。私達がこ

ういう立場をとれるかどうか。

毛沢東に「むちゃくちゃ」「ゆきすぎ」について論じただりがあります。農民の反抗―騒ぎは土豪劣紳、不法地主の悪事に理由があり、処罰はその悪事のひどさの程度によっており、不当に処罰することはめったにないと述べています。そういうことを考えるべきですね。

中核派の代理戦争論でもそうですが、自分たちが日本において、資本主義社会、帝国主義の中にあるのに、ベトナムの解放闘争はこうあるべきだというある一つの類型をつくるんですね。そして、それにあてはまらないと「『ベトナム』が歪曲している、ソ連が悪い、スターリニストだ」と言う。こういう意見が反スタ論なんですね。こういう考え方が大國主義的な思いがりで、ことを考える時必ず間違え。抑圧があったら抑圧者と被抑圧者を分ける。差別があったら差別する者と差別される者を分ける。そしてそこから考える、ということが重要だと思えます。そういうことを七〇年くらいに、入管闘争の年ですが、レーニンの『民族および植民地問題委員会報告』という論文を読んで考えました。

『七二年 『組織上の任務に関する一同志への手紙』

レーニン)

物江さんの話の赤軍派総括と関係しますが、どうやって非合法組織をつくるのか、非合法闘争と合法闘争はどのような関係にあるのか、そもそも革命家の組織とは何かという問題について、ないしはレーニンの言う民主主義的中央集権制について、すごく短い論文ですが『組織上の任務に関する一同志への手紙』は読んでハッとしました。

『七三年 『家族、私有財産および国家の起源』

エンゲルス)

最近の私の仲間で、「愛人ができたから」ということで離婚した者がいます。離婚というのは、いつでも男の方が問題でおきるわけで、かつて七三年に、東京の仲間の中でおきた時、『家族、私有財産および国家の起源』の読み合わせをしました。現在のブルジョア的な婚姻制度の理由とか、一夫一婦制というのはどういうことなのか、女性解放運動を考えるとときに必要な本だと思えます。

『七五年 『「橋のない川」(第二部) 糾弾要綱』

狭山中央闘争委員会)

七四年一〇月三十一日、狭山差別裁判で石川一雄さんに對して東京高等裁判所の寺尾が無期懲役の判決をだした。当時まだ青年部運動でしたが、その闘争に労働者としてやっと取り組み始めた時に、「橋のない川」糾弾闘争がありました。その中で、『橋のない川 糾弾要綱』という、土方鉄さんが書いた三〇ページぐらいのパンフレットを読みました。「狭山差別裁判」というパンフレットシリーズの第一五号にあります。

私たちが美だとか、文学だとか言うとき、差別的な美というか、かえって差別的なものがあるということ、真しに考える必要がある。「橋のない川」の上映を阻止する。というのが部落解放同盟の糾弾でした。私なんかそれまでは、「いくら差別的なものであっても自分を見て、悪いかどうか決めればいい」、「まだ見たことなかったから、ひそかにどっかで見ちゃおう」なんて思ってたんですね。それに対して『糾弾要綱』は、なぜ上映を阻止するのか、「見ることで自分が差別である」ということを主張しています。それを初めて読み合わせをして、やはり本当に「見ることで自分が差別である」、「見れば

どうやっても差別は拡大助長する」ということを考えさせられました。

『七五年 『差別と闘いつづけて』 朝田善之助』

昨年、藤田敬一さんが『同和はこわい考』という本を出して、今も論争が続いています。私は藤田さんの本は部落差別を拡大助長しているという意見です。たしかにいくつかの重要な指摘を含んでおり、部落解放運動をめぐる理論闘争が久し振りに公然と真正面から提起されたのは事実ですが、やはり彼の差別意識というか、書き方が良くない。

そういうことを考えさせられてきたのは、部落解放同盟の中央執行委員長だった朝田善之助さんが書いた『差別と闘いつづけて』を読んでいた。朝日新聞社から出ています。朝田さんはこの中で、たとえば「部落民に対する社会意識としての差別観念は、その差別の本質に照応して、日常生活化した伝統の力と教育によって、自己が意識するとしなやかかわらず、客観的には空気を吸うように一般大衆の意識のなかに入りこんでいる」、そして「日常、部落に生起する問題で、部落にとって、部落民にとって不利益な問題は一切差別である」という

テーゼを書いています。藤田さんはこれを問題にして、「・・・実践的には多様な理解を生み、一人歩きを始める。そもそも『不利益』というばくせんとした規定そのものに、ある種の恣意性を許す余地があったことは否めない。」と言い、このテーゼが同和はこわい、糾弾闘争はこわいというのをひきおこした旨の主張をしています。私は間違いだと思いません。私がこの朝田テーゼを読んで思いだしたのは『ドイツ・イデオロギー』の「支配階級の思想は、いつの時代にも支配的思想である」というテーゼです。のちに「社会意識としての差別観念」というテーゼになりますが、朝田理論の神髄はそのあたりにあると思うんですね。二つ目の朝田さんのテーゼは、確かに厳密な規定ではないと私も思いますが、だったらそれを厳密な規定にしていこうという努力こそしたほうがいいんじゃないかと思えます。

『橋のない川 糾弾要綱』と『差別と闘いつづけて』の二つの本は、本当に差別の現実と、それに対する部落解放同盟の理論的闘いの経緯を教えてくださいました。

〔七六年 『弁証法の問題について』 レーニン〕

これは、七六年に読書会で取り上げました。『哲学ノート』の中にあるわずか五ページの論文です。弁証法については『帝国主義と民族・植民地問題』とか、レーニンの著作にはほうぼうに出てくるんですが、どうも弁証法ってのは、わからないと思ってました。私が『哲学ノート』をやっと読み上げたのが七六年なんです。このたったの五ページにマルクス主義の核心というか、弁証法の全てがあると思えます。

〔八二年 『資本論』 マルクス〕

私が入三塚の第一次統一公判（六八年の二・二六から六九年の御料牧場開場式粉碎闘争）の被告として下獄したのが八二年でした。それでやっと読み上げたのが『資本論』です。毎日三時間ぐらいい読んで、四ヶ月半ぐらいいかかりました。私のいつもの癖で悪いんですが、傍線を引くだけの読みっぱなしで、ノートしない状態で出獄したので、八三年に出獄後ノートしようと思画したのですが、今でもできていません。『資本論』の第一巻だけでもいいが、第三巻まで読むと、ほんとうに今ぶつかって居る全体的なことについて出て来ます。何巻からでも、読め

るところから読んでみたらいいと思います。たまたま私の場合、獄中に一年いて、日常的な活動から離れることができてやっと読めたわけです。

4 歴史、伝記、

小説、ルポから入る

人が革命をどうやってきたのか、被差別大衆がどういうことで運動をやっているのか、歴史、伝記、小説、ルポなどから入ると、けっこう理解させるものがあります。私が読んで良かったなあと思った本をいくつか紹介したいと思います。

『世界をゆるがした一〇日間』—ジョン・リードというアメリカの記者で、後のアメリカ共産党の副議長になった人が書いた本で、ロシア一〇月革命のことなんです。これは読み上げるまで眠れませんでした。徹夜して、革命ってこういうものかと震えるような思いで読みました。

『レーニンの思い出』—ボルシェビキの前身であったナロードニキ運動との関係とか、その中からレーニンが学んだものとか、ずいぶん出てきます。また、レーニン

がどういうことで考えてきたのか、自分の生き方をどう考えてきたのか、そういうことをわからしてくれた本でした。

『ホー・チ・ミン』—私が読んだのはベトナムの勝利の後でした。ベトナム労働党が出しているホー・チ・ミンの正伝で、東邦出版より出ています。この本には今のカンボジア問題、すなわち、ベトナムがカンボジアを侵略したと言われていますが、それについての回答があると思います。ベトナム労働党は、もともとインドシナ共産党ということづくられたそうで、ホー・チ・ミンはその中心だった。フランスの植民地だったインドシナ全体でホー・チ・ミンのいた位置とか、中国共産党とインドシナ共産党が一期期、上海を拠点にして、コミンテルンの極東指令部をホー・チ・ミンの指導下でおくんですが、そういう歴史を明らかにしてくれます。そういうことをやっと知って、後の中国共産党のベトナム懲罰問題の背景や、ベトナム労働党と解放戦線の関係について考えさせられました。

『パリ燃ゆ』—これは、三里塚闘争に連帯する会の東京神奈川連絡会議の代表だった水沢三郎さんが以前から「読んだら」と私に言っていた本で、読んだのは獄中でし

た。大佛次郎が書いた全四巻で朝日新聞社です。パブリコ
ンミュオンについて書いた一番いい本の一つです。

『フランス革命史』—ミシユレが書いた本で、中央公
論社の世界の名著シリーズにあります。ロビエスピエー
ルは冷たくて、悪いという評価が多いのですが、ロビエ
スピエールがすごくいきいきとして、一貫したフランス
大革命の中心だったと感じとらせてくれたのが、この本
です。これは、本当に膨大な事件が書いてあるんですが、
それでも一気に読ませるとい意味でおもしろいと思っ
ます。

『野に起つ』—これは、戸村一作さんの本ですね。私
はこの本を読んで、三里塚闘争や反対同盟について何が
問題であったか、けっこうすっきりしたという経緯があ
って、八三年三・八分裂において私たちがとった態度や、
今の空港反対同盟との関係とかの基礎になりました。

『苦海浄土』—私のつれあいが大学三回生ぐらいの時
読んで、前から勧められていたんですが、読んだのは獄
中でした。石牟礼道子さんが書いた、水俣病の最初の有
名な本ですね。患者の苦しみ、怨念が本当に伝わって
くるんですね。

『にんげん』—これは部落解放同盟の同和教育で使っ

ている本ですね。小学生用もあれば中学生用もあります。

民話などの中に、たくさん部落民の思いが出ています。
意外と気がつかないことが多いと考えさせられました。

『戦争と平和』—大学一回生の時に読んだんですが、
トルストイの有名な小説ですね。各章の冒頭、ゴチャゴ
チャ一〇ページぐらい論文形式で書いてあります。その
後が恋愛小説みたいな形なんです。最初、これはよく
わかりませんでした。ロシアの青年将校達が自由主義を
求めた最初の事件であるデカブリストの乱をテーマにし
ています。貴族生活のいやらしさや、農奴との関係がけ
っこうほうぼう出てきます。私は最初に読んだ時、どう
も論文はいやで、あまり頭に入らなかったんですが、後
でもう一度読み返した時に、彼がロシアのどういうイン
テリゲンチヤ運動の中にいたのか、考えさせられるもの
がありました。



5 「対立物の統一」

ということ

いろいろな本について解題してきましたが、まとめ的
に、レーニンが『弁証法の問題について』で書いている
「対立物の統一」ということについて話してみたいと思っ
ます。

① 個別と普遍

何か一つの個別の大衆運動をやっても、共産主義運
動にちっともつながらない、ないしは共産主義というの
は何かそれと別のものじゃないかと思うことがあります。
それについて、レーニンは『弁証法の問題について』の
テーゼで「つまり、対立物（個別的なものは普遍的なも
のに対立している）は同一である・個別的なものは、
普遍的なものへ通じる連関のうち以外には、存在しない。
普遍的なものは、個別的なものの中にだけ、個別的な
ものを通じてだけ存在する。あらゆる個別的なものは、
（いずれにしても）普遍的なものである。」と言ってい
ます。

物江さんの話で「民主主義の徹底化」というのが出て

きますから、関連して話しますと、民主主義闘争を徹底
すると社会主義に成長、転化する。社会主義とか共産主
義は、その一つのもの、個別のものを通してしかないの
ですね。例えば女性解放運動、女性問題についてどうす
るか。女性差別について考え抜いてやっていく。「マ
ルクス主義者にとっては、男女の実質的な平等というの
は自明のものです。」とレーニンは言っています（レー
ニン『青年婦人論』）。ある男の人が運動の中心だとす
ると、つれあいである女性はそれを支えて、夫が余った
時間で一部活動する、こういうことを今の反戦派の中で
思っている人はけっこう多いですよ。これは間違いで
す。実質的な、社会的な平等をつくり出していく、その
中からしか、やっぱりブルジョア社会を転覆できないと
思います。

個別が普遍につながっているということ、何か考え
る時に必ず、一つの問題で考える。部落差別でもいいで
す。女性差別でもいいです。女性差別をめぐって、差別
があったら、差別をなくすということとそこで必死に努
力しないと無理ですよ。それを、他の、別のもので補
完してなんとかしよう、よく考えられるんです。そう
いうことを認めないというのが、『弁証法の問題につい

て』にあるテーゼであるわけです。

② 北原派と熱田派

「対立物の統一」、これは難しくてもわからなかった。あるものには「対立物の同一」とあり、これは何だろうと、ずうっと考えてきました。レーニンが「統一」と言ったほうが正しいんじゃないかと言ってますが、他方「同一」と言ってもいいと。

例えば、三里塚空港反対同盟が一九八三年、反対同盟農民の主体性を認めるかどうかということで、北原派と熱田派に分裂しましたね。ただ、主体性を認めると言ったからといって、熱田派の支援が以降そういうぐあいにするかどうかは別ですね。たまたま傾向的にそのように分かれただけのことであって、今度は熱田派の中で、反対同盟の主体に反対するものが出てくるんですよ。そういうことを認めるといのが「対立物の統一」ということです。それをわかっている人は、「自分は熱田派を支援しているのだから、農民の人たちを損なっていないはずだ」と言う。例えば同盟から何かを言われると、「自分はそんなことを言われる覚えはない」と言う人が出てくる。

ないしは、北原派と熱田派に分かれたけれども、三里塚闘争は北原派も含めてやはりあるわけですね。私は熱田派が正しいと思って、熱田派を支援していますが、い

くら熱田派の支援からなくなったといっても、この世の中に存在するものは全て関係あるんであって、対立があるといったら、対立している中に、対立物の闘争の中に生命力があるんですよ。だから、中核派、そしてブントの中では戦旗西田派と蜂起派が北原派に行ってますが、その人たちも含めて、どう実際はやっていくのかということを考えてなくっちゃいけない。その中で、熱田派の力をどうやってつくるのか、ないしは次のどういう統一をつくりだすのか考えるべきではないかと思えます。一つの組織を、二つに分けて、その組織をその二つの傾向の対立と認識するのが弁証法だと。自分の中に、二つの対立するものを見て、それについてどうするかいつも考える、そういうことを教えるという意味で『弁証法の問題について』は重要だと思えます。

③ 三派全学連

さっきでた、三派というのはブントと中核派と解放派のことですが、ブントが日本の革命運動でもっとも中心的フラクションたりえてきたのは、統一戦線とか党派間の共同闘争とか、ブントがいつも呼びかけて、一つの基準をつくりだしてきたという点にあります。そういう一つの基準をつくってやっていくという志向は、弁証法の問題に関係があるんですね。

三派全学連をつくれれば、実際はブントと中核派、解放派の論争でした。中核派、解放派との論争を通じて、自分を鍛えるわけですね。でも、やはりその中核派や解放派を含めたのが三派なんですね。この三派連合となった時の学生運動は、この三派と日本共産党という分かれ方をします、まんなかに構造改革派が入りますが、そうすると、この三派全学連とその他という対立と統一があるわけですよ。その中に生命力がある。

中核派がいつも、北原派の分裂の後もそうですが、自分のところではないのはいせん滅するというか、なくすという志向がありますね。この中に間違いがある。やっぱり自分と対立していた片方がなくなったら、自分が倒れることになるんですよ。中核派は、一九八三年の分裂の

契機で言っても間違っています。仮に百歩譲って中核派が正しかったとして、それでも熱田派との闘争の中に、実際は生命力がある。そういうことを考える志向をもつかどうか革共同主義とブント主義の大きな分岐点です。何かやる時には、自分がどう呼びかけるかということが一つですが、もう一つは、どこまで基準に入れるか、どこまで誘うかが考えるべきことです。基準に適合しない人は誘わないほうがいいですね。その人も苦しむし、全体も苦しむから。必ず一つの組織をつくる、運動をやるという時には、どこまでと結ぶかということですね。そして、その呼びかけた自分と対立した人が多く参加するほど運動は強い。そういうふうに見えることを教えてくださいましたのが弁証法です。

④ フォトニュースひろば

『フォトニュースひろば』には、実にいろんな傾向の人が登場しますよね。他の面から見れば、『ひろば』というものは、統一した一つの志向を示しているわけですが、例えば、糾弾に伝えるという志向を編集部が持ちながら、それと逆の意見の人が『ひろば』の場に集まってこられるようなものをつくってみたいと考えています。よく、

レーニンとは民主主義的中央集権制というから、対立した意見など載せさせないというぐあいに、みんな誤解します。これから、共産党を本当に日本でつくりだすという時に、機関紙活動が一番重要な問題だと思っていますが、ロシア社会民主党機関紙『イスクラ』についてレーニンは書いています。「確固たる共産主義というのはボルシェビキ的な傾向で、他に對しては純化して闘わなければならぬが、ロシア内にある全ての色合いを『イスクラ』は反映する。反映させる紙面をつくらなくてはいけない」と。意外とみんなそう思わないですよ。ボルシェビキ派、ないしは共産党、共産主義運動は何か自分と違う傾向が絶対に存在してはいけないと思いませんか？ そうですね。そうじゃなくて、できる限り対立した傾向を自分のもとに結合させることが、運動にとって一番重要なことだと思っています。『唯物論と経験主義批判』など、いろいろレーニンの哲学論文もありますが、それをまとめあげたのが『弁証法の問題について』という短い文章なんです。これから学ぶことは多いんじゃないかと思えます。

⑤ マルクス主義の有効性

今の世の中で、普段触れていながらわからないことについて解いてくれるのがマルクス主義だと思うんですね。昔、ブントは「マルクス、エンゲルスを乗り越える」と言っていたんですが、それは小ブルジョアの思い上がりであって、間違いですね。マルクスやレーニンを読んで、それが現在ではどうすることなのかというのを、その教えの中から発見していくのがマルクス主義の立場だと思っています。今、「マルクス主義は終わった」という洪水のようなキャンペーンがあります。特に、反戦派の中で最近そう言う人が多い。そうじゃない、今こそマルクス主義、共産主義の本を読んで、身につけるといいのをおみんなに勧めたい。そして、これからどうやっていくのか、本をみんなと一緒に読んだりして、考えていきたいと思えます。



団結とか、

共同行動とかについて

— 物江古兎甲力

(つぶせ！刑法・監獄法改悪 反弾圧大阪連絡会議)

今回、合宿をするに当たって、僕もあまり昔の自分の総括をキチンと話したことがないので、この間考ええてきたことを、一度話してみたいと思います。

僕らの年代がいちばん運動をやっていた時期から二〇年も経っているわけで、あっという間の二〇年だったという気がします。若い方にはなかなか理解しにくいと思いますけど、できる限り共有できるように話してみたいと思います。

1 「七〇年闘争」から

学んだこと

① 極めて分かり易い闘い

六〇年代後半から七〇年代の闘争は、七〇年安保闘争とか或いはベトナム反戦闘争とか全共闘運動と呼ばれています。確かに、アメリカのベトナム侵略に対するベトナムの民族解放戦線を中心とする民族解放闘争が、アメリカを打ち破る形で展開されていったわけで、歴史的な構造が変わってきたという時代でした。その中で、日本だけではなくて全世界のいろいろな闘いが広がっていて、やはり、あのベトナム人民の英雄的な闘いがどう連帯していくのかというところで、世界的な闘いがありました。日本では、その中で沖縄の基地がかなり問われました、日本自身がアメリカの後方支援の役割を果たしていたということもあって、アメリカ帝国主義と同時に日本帝国主義との闘いとして、学生を中心に非常に大衆的な闘争として展開されました。

一方、中国でも毛沢東の文化大革命がありました、文化大革命に対して現段階でどういう評価を与えるかというのはいろいろ問題がありますが、「社会主義国」の中

での階級闘争はどう成立していくのか、どういう矛盾があるのかといういろいろな提起がなされました。それから、「社会主義」が一つの「大後方」としていろいろな運動を支援していくという、その言葉の割には内実がどうだったのかという点では再び検証されなければならぬにしても、そういう一つの大きな世界的な運動の連関みたいなものが、自分たちの目の前に見えてくるという時代だったと思います。

次には、今でも具体的には当時と違った意味で世界的な運動の連関というものがあつたわけですが、これがまさしく、日々運動の連関ということが判ってきた時代だったと思います。

当時、闘いの位置づけを沢山言いましたけれども、実は非常に単純な闘いでした。ベトナムからアメリカが出て行くべきだ、ベトナムの民族解放闘争を断固支持していこう、日本がベトナム戦争に加担するのは許せないという、非常に分かり易い闘いだったということです。そういう意味では、その中でべ平連みたいな市民組織がいろいろ出てきますけれども、非常に単純な誰にでも言えるかたちの運動であつたと思います。

僕はアントンという組織に、半分は社会学同という学生組織に当時いたんですけども、現実を現実のまま、もう一度キチンと把握しきれずとは、どういう意味なのかについてには非常にやりやすかつた、そういう党構造を伝統的に持った組織だったという風に思っています。

③ ベトナムの闘いに連帯するという質を問う中で

実は、そこだけで話が終わったら非常にありがたいんですけども、そこからいろいろとアトがあるわけです。六七年一〇・八闘争が起つて、アツと言う間にゲバ棒を持つ、或いは暴力ということが問題になる。世界的な運動との連関の中で、暴力性を持つ質が当たり前になつていく、そんな時代でもありました。日本だけではなくて、世界的にもそうだったと思います。ベトナム自身が、まさにアメリカのジュウタン爆撃を受けて緊迫した迫撃戦の中にあつて、それを打ち破っていくという物凄い闘いを行っているのですから。その闘いと連帯するという時に、自分たちの闘いの質とはいったいどんな質なのか、ということを考えざるを得なかつたわけです。

暴力の問題における限界みたいなことを感じつつも、自然発生性もあつて一〇・八の闘争になつていく感じで

② 思い込みで世界を解釈してしまう誤り

そこでは、逆に党派の方がベトナムの民族解放闘争や第三世界の闘いということを理解できずに、スターリニストと帝国主義の代理戦争という規定を試みたりで、現実のあるがままの姿を的確に把握できない。逆に、一つの思い込みで世界を解釈してしまう誤りを平気でおかしてしまう傾向がありました。どうしても、自分たちで作った世界観みたいな所からしか現実が見えない。現実から出発して、もう一度現実には添って把握して、自分たちが変革の方向で再構成していくという作業をするよりは、自分の頭の中で一つの思い込んだ図式を当てはめるという風な世界の解釈の仕方というのがあるんだ、ということをお話ししたいと思います。

みんな、運動の原点にはそんなに違いはなくて、戦争に反対だ、或いは帝国主義の侵略に反対だ、ベトナム人民の英雄的な闘いに連帯しようという、非常に単純な形の運動として実は心の中であり、みんなそう思って運動をやっているんだけど、逆に指導というか党というか運動を指導すると言っている方が歪曲した闘いを展開することが大いにあるんだということを、当時学んだという事です。

した。それから佐世保があり、王子があり、当時僕らが成田闘争と言っていた三里塚の闘争があつて、更に六九年の安保改定の時にどうするかという話になつていったのです。その頃は、佐世保にしても王子や三里塚にしても、焦点となつている所に学生が中心となつて闘いを挑んでいくという感じの闘いで、それが非常に大衆的な共感を呼ぶという闘争でした。

闘争が進めば進むほど、どうしても暴力性というか、運動が進展していくわけで、アツと言う間に、石を投げるから硬い楯棒を持つという闘争まで、ズーッと一直線に突き進んでいくという感じでした。次の闘いには次の新しいことが許され、次の闘いでは更に次のことが、という形で、約一年半から二年の間に急速に形態は進んでいくわけです。

そうなりますと、一緒に闘っている仲間の間でもいろいろと論争が起つてきます。その中で、革命ということを一応考え始める―当時、本当に革命ができる状況にあつたのかと言えば、非常に疑問ですが、一定の闘いまでは行けるのではないかというような、仮定での意識がいろいろ出てきます。或いは、これ以降の闘争をどういう形で継続していくのか、という問題が出てきます。

学生の意識、或いは労働者でやってきた人の意識、いろいろな意識があって、それぞれ立場の違いもあって論争になるわけです。僕が、党という問題について考え出したというのはそういう時代からで、党というのは一体何なのか、ということを考え続ける根拠になっています。

2 共産党同赤軍派の問題意識

① プントの中での論争

プントの中での話では、ピークだと思われていた六九年の秋に、いったいどういう闘いを組むのかという現実的な所から論争が始まりました。どういう闘争を組むべきなのか、どういうことを課題にすべきなのかということと、それぞれのいろいろな地域性・立場というものを一応反映しながら、論争が起こってきました。

当時、僕は関西にいましたが、関西のプント内部の論争の中で一番鮮明に覚えているのは、党が軍隊を持つのか持たないのかという論争でした。当時の論争の中味は水準としては非常に貧しくて、ソビエトができてから軍隊ができるのか、軍隊ができたからソビエトがあるのか、という論争を必死にやっていたのです。今から思えば非

常に陳腐な論争をやっていたわけですが、逆に当時は非常に重要な論争としてあったという風に思います。

というのは、僕たちはそれ以降、軍事とかいろんな問題にぶち当たって行くわけですが、党が軍隊を持つことが必要であるという当たり前のことが、当たり前のこととして組織の中に持つことができませんでした。常に現実の方が前に前に行ってしまうので、事態に遭遇してから、慌ててそういう論争が起こったのです。指導している連中の方がアタフタして、その現実の解決策を考えると、逆に今までの団結等々が壊れてしまうというようなことになってしまふ。そんな一つの時代だったし、僕たちはそういう水準だったのです。

大体、プントに入った人間は、レーニンの「何を為すべきか」が必読とされていて、レーニンは「何を為すべきか」の中で、党派闘争が党を生き生きさせていくんだということを書いていて、そう思い込んでいたわけですが、しかしながら、一般的にこう言っているだけでは済まない事態が進行したのです。当時、僕は分裂に対して最終的に反対でしたが、そんなことを一般的に言っても仕方無いわけで、現実には分裂してしまつたわけです。あの時の党派闘争のやり方は、今から考えると非常に自然発

生的と言わざるを得ないものでした。従って、自然発生的な党内闘争をやったことに対しては、自分たちの教訓として持ち続けねばならないと思います。

しかし当時の僕たち水準は、その時その時に応じていろいろな解釈をしてみせることで左翼性を保ってきただけで、現実の闘いが前進していく中で、自分たちがやっておかねばならない任務とは何かがなかなか獲得できなかった。やはりプントというのは、自然発生の先頭に立つことはできたけれども、革命期というか、一つの大きな運動の転換期という時期には、指導するに足る組織ではなかった。そういう組織として当初から作られてこなかったと思います。

では、それは何故なのか。

日本の戦前戦後の共産主義運動の歴史は幾多のことを体験してきました。その中には、非常に否定的な側面と、いくらかでも肯定的な側面とがあります。しかしながら僕たちが引き継いだ、或いは少なくとも習った歴史の多くは、非常に否定的な歴史でしかありません。戦前の失敗、戦後の失敗、それから例の武装闘争から六全協の失敗、六全協になる過程での失敗、そういう歴史は山ほど聞いたけれども、聞ってきた人民の歴史はなかなか継承

されてこないというようなことがあります。何故か、歴史と言えば負の歴史ばかりが継承されてきました。人民の闘いの歴史は、抽象的にこういうことがあったよ、・・・ということでは継承されるけれども、その段階、その時には、失敗の問題と獲得した問題と両方がある筈なのに、獲得した問題がなかなか伝わらない。それは、党から離れたら、分派したりということがあるからかも知れませんが。ですから、そういう継承がないが故に、いざ闘いがそういう段階に来た時には、当時で言えば、ソビエトが先か軍隊が先か、というような先程の論争が起こってしまうのです。

② 予定調和的ではない闘いを、という気持ちと

ともかく、六九年秋にはできる限り、今まで闘ってきたものを全力をあげて、ここで前段階の革命的な所まで行きたいという意思統一を、僕たちは行うわけです。そして六九年七月六日に赤軍派という形で登場して、具体的には軍の領域へと傾斜していくわけです。そして、それに見合った世界の解釈の仕方として、当時僕たちは「過渡期世界論」というのを提起しました。つまり、この「過渡期世界論」というのは、逆にそういうものに見

合った中味であるという風に考えた方が良く、僕は思
います。それ自身が何か画期的な理論なのかどうかとい
う点については、非常に議論の余地のあるところだと思
います。

赤軍派として登場した僕たちが提起した問題はいろ
ろありましたが、中心は、六九年秋にはやはり権力問題
が大切だということでした。それで、一般的なデモン
ストレーションや一般的な宣伝としての軍事でなくて、本
気で首相官邸を襲うということを、六九年の秋に設定す
るわけです。それまで一つ一つの闘争を本気でやってき
たことは事実ですが、機動隊を突破することはあっても
それはタマタマで本場に勝ち切ることはなかった。そう
ではなくて、本場に結果として死んでも良いから首相官
邸を一回突破してみよう、という意思統一をするわけで
す。ところが、それが一方では運動の中の必然でありな
がら、一方では無茶だな、無理だなという気持ちが半分
位ある。そういう闘争でした(笑)。

ですから、目的意識的に一連の闘いの継続の中に位置
づけられたり、敵を見据えた所で軍事戦略の一環として
キチンと設定されていたわけではありませんでした。そ
れぐらいの能力しかないけれども、少なくとも本気でそ

くるわけです。

そういう時になるといつもオタオタしてきたのが日本
の階級闘争の歴史なんですね。つまり、日本で本格的な
軍事闘争をしようと思っても、なかなかそういう軍隊は
形成しにくい。実はそこに大きな間違いがあって、そう
いうものは系統的な組織の中で自らの国の中で成長し、
自国の中で定着し、自国の中で運動を展開できるくらい
の中味を持たなければならぬです。

ところが当時としては、非常に安易なことに、キュー
バという所を考えたのです。そういう「社会主義国家」
の援助のもとでそういうものを作ろうとしたわけです。
自力更生というか、自国でやるべきことを、他国の援助
というところに自然発生的に求めていったという悪い一
つの傾向の象徴がありました。しかし当時、「大菩薩」
で敗北して以降、そういうことしか考えられなかった。
だから連合赤軍の事件まで行ってしまい、とにかく悲惨
な結果に最後はなってしまう。

ここで全力をあげた闘いを一度組み切らないことには、何
も見えない・見えてこないのではないかというのが、当
時の僕の意識でした。一つの予定調和的な運動ではなく
て、そこで何かを見極めないことには次の展開はないと
いう気持ち、一方ではそれ自身が非常に無茶だ、或いは
それが本場に継続性を持ちうるのか、という点での非常
な疑問、そんな中でいろいろと判断が行われます。そし
て、それまで非公然のことをやってきた人間と、公然の
闘争をやってきた人間が、そこである時にパッとドッキ
ングしても、権力からは見えてしまうわけで、結局は未
然に失敗してしまいます。それが「大菩薩」です。「大
菩薩」は、実は首相官邸への軍事闘争を予定しながら、
その事前にパクられた闘争でした。大衆運動から軍事へ
の移行点というか、暴力性を持った一連の闘争の頂点み
たいなところに「大菩薩」はあったと思います。

それから僕たちは、ハイジャックをやるわけです。当
時の僕たちブントは、「国際主義と組織された暴力」或
いは「国際主義・プロレタリア独裁・暴力革命」をス
ローガンとして掲げていました。しかし、本場の暴力革
命とはいったいどういうものなのかとか、国際主義とい
うのも最終的にはどういうことなのかという議論が出て

③ 「連赤」という大敗北の中で考えたこと

その後、僕たちは「連合赤軍事件」の中で、仲間を殺
してしまおうというようなことを体験しました。何故こん
な事件が起こったのか。昨日まで一緒に苦しい闘争を
闘ってきた仲間を、何故信用できなくなるのかと、本當
に一人一人の顔を浮かべながらいろいろと考えました。

とにかく、「連合赤軍事件」の最大の敗北の原因は何
か、ということを考えます。あの当時の彼らが置かれて
いた状況はどういうものであったのか、そしてどうい
う論理が作られていったのかは、だいたい想像がつかます。
当時の運動状況は後退期に入りかけていて、僕たちは軍
事闘争の継承を考えていました。しかし一方で、権力と
の関係も煮詰まっていました。このように状況が煮詰
まった中で、非常に倫理的なモラリスティックな提起し
かなされないという事態が生まれます。「あるべき共産
主義」みたいな言い方で、中心的指導者のモラルを押し
つけていくわけです。そして一人一人の人間が共産主義
化していくことが課題とされ、日常生活の中でそれが点
検されることとなります。

本當は「あるべき共産主義」など何処にもないわけで、
人民が抱えている課題を人民と共に解決していくという

こと、その中で部分にすぎないけれど一つの先端領域を自分たちが担っていくこと、その中で一つ一つ見つけ出し、獲得していくしかないのです。ところが「共産主義」という言葉を魔物にして、党としての非公然の維持、革命情勢の判断、戦略的展開の中での位置づけという具体的なことが、共産主義化という個人のモラルになってしまいました。勿論、一人一人は共産主義者であり、共産主義社会の実現に向けて闘っているわけですが、このことが日常のモラル—それも主観的な—で図られる。党の共産主義化というある種の擬似共同体を持ってきて、戦闘性を保とうとしたのです。

それは、逆立ちした、逆転した論理なわけで、最後には解体することになったのです。

現実の闘いの中ではいろいろと疲れや悩みや動揺が出てきます。いろいろな矛盾はむしろ内部の中から起こってくるものです。例えば、ある仲間が非公然の領域を抱えていて、何かの問題で消耗しているということもあるでしょう。その時に最低限のこととして、彼は絶対にどのようなことがあっても仲間を裏切らないだろうという信頼感を絶対持つべきだと思います。もし、そういう信頼感がないのだとしたら、そういう組織は解体すべき

総括に関わる問題で言えば、戦前戦後の在日朝鮮人と日本人の共闘の問題があります。勿論、あの当時はスターリンの一国一党の指導があつて、急に一つになった。日本人の闘う側の差別性が朝鮮人の闘う人々をひきまわす結果となったという話は、勿論聞いてきました。確かに間違いだつたと思います。しかしながら当時はスターリンの影響力は決定的だつたわけで、良いか悪いかは別として当時やはり、日本人と朝鮮人が共に闘えるという喜びを感じたということがあるわけです。そういう闘いの歴史もあるわけで、克服できなかった面とごく積極的だつた面と、いろんな側面を、私達は運動の中で継承してこれなかったことは、非常に日本の運動を歪めてきました。共産党はやはり大きくて、どうしても共産党との関係で自分たちを見ざるを得ないという歴史的な制約があるわけですが、継承すべきこと、闘いの中で何に突き当たったのか、何が限界だつたのかを、次の世代に伝えていかないと、次の世代はまた一からやり直すということになります。

もう一つは現状に関わる問題です。国内におけるところの排外主義に対する闘い、そして在日朝鮮人との共闘は、七〇年当時の僕たちの闘いの中では大きく欠落して

だし、解体しても良いと思います。逆にそんな信頼感が組織の中にないの非公然領域に着手すると、最終的には悲劇的な結果になってしまいました。

その良い見本が僕たちの中である時期に起こつたわけです。非常に真面目で、逆に言えば非常に思い詰めている。そうであるが故に、一つの時代の中で自分たちの課題だけを必死に追求すれば、そこで思い詰めて最後はあいう形になっていくのではないかと思います。

3 現在考えていること

1 国際主義について

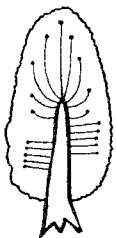
僕たちは、国際主義ということについては、一貫して運動の基軸に置いてきたつもりでいます。このことの解決なしには運動の前進はないという風に一貫して思ってきました。

① 在日朝鮮人との共闘

かつての国際主義の総括のひとつとして、僕が考えている現在の課題は、やはり在日朝鮮人との共闘のあり方の問題です。

いた部分の一つでもありますし、現在ますます重要な課題となっています。

従って、この問題を抜きに国際的な問題は語ることはできないだろうと思います。この問題は非常に重要だし、話し出せばそれだけで一時間位はかかる内容があります。だから簡単に結論だけを言えば、僕たちは抑圧民族である。このことを踏まえた上で、しかしながら組織的には一つの組織であるという風に僕は考えています。やはり在日朝鮮人など日の人達と共に一緒に作れるような組織でないこと、党という内実を握えることは出来ないし、在日朝鮮人独自のフラクションがあることを前提とした上で一つの組織を、共に作っていく必要があると思います。そういうことができる位に、日常的に闘争を組める中味を作れているか、そういう闘争が組めているか、ということが重要だと思えます。



② 国際連帯運動について

現在の日本の国際連帯運動については、僕は非常に不満を持っています。どこかの国の人を呼んできたり、よそで聞っている組織と顔をつなげば国際連帯運動をやっているつもりというのは、日本の左翼の悪い所です。それでしか国際連帯を語れないとすれば、自分たちの運動の水準はそんなものだと思っただ方が良いと思います。

もう一つ、日本の左翼には悪い所があります。いろいろな運動や問題が起こると、それに対して評論することです。文革、四人組、鄧小平、いろいろあります。評論することで立場の違いを作る。それがあたかも国際主義かのようにいって評論をしたがる。判らない時は沈黙すればいいものを、わからない所でも、何か言わなければ立場が無いみたいなことを日本の左翼は平気でやってきたという歴史があります。そんな評論が分裂を招いたり、違いを作る根拠であったりするのなら、そんな評論はいらぬと思うのです。

本来の意味で、国際的な共同闘争を作っていくというの、僕の一貫した願いです。それは、国際的な連帯を闘っている人、例えばフィリピンを闘っている人なんかは、良く判っていることでしょうが。何かお金で

方が本当にどんなにしんどいことか、という内容の文章を出しています。僕は確かにその通りだと思います。それに対して、こうあるべきだと観念的なことを無理に当てはめたところで、どのくらい意味があるのかと思いません。

その上で敢えて結論的に乱暴に言えば、戦後の革命をなし遂げた所は所謂コミンテルンの指導があつて、且つそれを相対化できる自立的な自力更生の闘いがあつたところだと思えます。つまり、自力更生、自分の所に根ざして自分で自国の人民と闘いを進めながら、且つ、やはりあらゆる革命が「社会主義国」の援助なしには成就できなかったということです。それは、現在のニカラグアにせよパレスチナにせよそうなのではないでしょうか。自立した闘い、自力更生の闘いをしながら、且つ、いろいろな問題を含みながらも「社会主義国」からの援助は援助として獲得していくという現実を、僕たちは見る必要があります。

そしてやはり日本の革命を考える時にも、国際的な連関、国際的共同行動の力が絶対に必要だし、客観的にはカッコ付きではあれ社会主義国との関係を抜きにしては考えられないと思います。つまり、言い方が微妙になり

も持って行って、向こうと顔つなぎをして、・・・そんなことをするよりも、日本で弁護士とか様々な人達を含んだ派遣団を組織して抑圧の実態を暴露するとか、いろいろやれることがあると思うんです。こんなことは当たり前だけでも、本当に共に闘う仲間としてやっていく中で、初めて切実に感じるのだと思うんです。

③ 「社会主義国家」について

もう一つは、いわゆる「社会主義国家」の問題をどう評価していくのかという問題です。レーニンが死んで以降、第三インターコムンテルンはスターリンの主導になって、いわゆるスターリンの指導の誤りが世界的に拡大します。その中で、例えば第二次大戦後の革命運動が、多くの国で挫折しました。日本でも米軍を解放軍規定しましたし、朝鮮でも三相会議等々の状況に切り込むことができなかったという歴史的事実があります。しかし現実には存在し、困難な中で社会主義の建設に向かって頑張っている国々を無視できるかということなのです。

僕はブントの系列として、ありうべき社会主義という形で考えたことはあまりありません。実は最近、ベトナム共産党が、革命をやることより革命以後の経済建設のますが、国際的な立場と国際的な共同の力で自国の闘いを支える。自国の闘いと具体的に結びつけて実践していくということが、日本の今後の階級闘争というか、運動にとって絶対に必要なことだと思えます。

勿論、社会主義国でのとりわけスターリンの誤りなどは徹底的に指摘する必要があります。ただ同時に、その誤りを相対化できる具体的な力と、一方では全世界的な構図の中では確実に闘っている社会主義国家としての存在を積極的に評価していける力が必要だと思えます。

今の時代に引きつけて言えば、パレストロイカと言われるものが一つの焦点だと僕は思います。パレストロイカにはいろいろな評価があり、いろんな側面があると思います。しかし僕らの基本的な考え方は、ようやくソ連も上からの革命をやる余裕ができたのかなということだと思います。これまで多くの国民があれだけの矛盾を抱えていて改革が要求されてきたけれどもなかなかできなかった、それがようやく上からの革命という形だけでもできる余裕がでてきたということだと思えます。

そして、このパレストロイカ或いはソ連の平和攻勢を、僕たちが積極的に自分たちの前進のために使えるかどうかは、僕たちが自身も闘いかた次第だと考えています。

直接に共同するのではなくても、平和攻勢なりを我々の闘いの前進の中でどのように位置づけていけるかを考えたと思います。そうすれば、自分たちの闘いの中にいろいろな変化を位置づけることができるし、そんな力を蓄えることができるのではないかと思います。

何でこういうことを言うかと言えば、これは、僕ないしは僕たちのジグザグなんです。先進国の革命が一番の主要な課題なんだ、というのがマルクス、レーニンの基本的な考え方。しかし現実には、第三世界の革命・民族解放闘争が運動の主流を成しているという現実。そんな中で、或いは他国の援助を含めながら階級闘争を考えていくしかないのかなと思ったり、というジグザグなんです。そして今は、日本の階級闘争と第三世界の階級闘争が具体的に連関し相互援助ができる、自国内に閉じ籠もるわけではないし、かと言って他の国に依存するわけでもない、そんな風に考えています。同時にそれは、先程言った国内における日本人と在日朝鮮人との、或いはこれからの外国人労働者との共同闘争がどう組織されるのかということとも関連して、これからの日本の運動のうねりの中で大きな役割を占めて来るだろうと思います。実際に、レーニンの闘いから学ぶのと同じように、第三

階級的な視点から、或いは地球全体の問題から考える、いろんな視点があると思います。あって当たり前です。また、その反原発をやっている人と例えば天皇をやっている人、寄せ場の闘争をやっている人、或いは国際的な連帯運動をやっている人とが出会います。その出会いの中でそれぞれが考えることが沢山出てきます。本当に自分の命だけで良いんだろうか、地球の三分の二の人は食えないという状況の中で自分たちだけのことを考えていて良いのだろうか、という疑問が湧いてきたりします。いろいろな運動と運動の出会いが、人々を変える時代によくやくなってきたという実感があります。両方の運動と運動とが出会う中で、運動が全体として変わり、その中で人が変わり、人々の結びつきが変わっていく、ということがようやくでき始めた時代かな、という気がしています。

同時に地域では、それぞれの課題を担いながら、例えば国家秘密法とか天皇の問題とかその時々々に権力との関係で重要な課題は全体でやろう、ということができ始めています。これはすごく大切なことで、革命とか、或いは大きな闘いと言っても、自分たちの具体的な課題からしか出発しないわけです。具体的な課題から出発しなが

世界の闘いからいろんなことを学んでいくべきだという風に思っています。

II 民主主義的な闘いを徹底すること

① 運動と運動との出会いが人々の結びつきを変える

具体的な闘いというのは、いろんな民主主義的な闘いをどう徹底していくかということだと思います。現に今原発があり、三里塚があり、或いは監獄法みたいな闘いがあり、というような闘いをどこまで徹底して闘っていくかということではない。或いは、本来は僕たちが闘わねばならない問題として、消費税とかリクルートとかがあるわけですが、なかなかそういう領域まで実は手が伸びていないという現実がある。その意味では、本来的には闘わねばならない所も聞えずにいるというのが現実です。そんな闘いも含めて、徹底して現在の矛盾を暴露し、我々の考えていることを徹底して要求する。それぞれの課題においては、統一して運動を進めていく。これらのことが運動の前提だと思います。

最近では、いろいろと運動と運動が出会うことが多くなってきました。例えば、反原発の中にもいろんな傾向の人がいます。ただただ命が惜しいということから、

ら、その具体的な課題がいろんな他の課題、時には権力の問題にぶつかっていく中で、量だけではない何かを獲得していく過程があると思います。

その時に、僕たちが最近感じることは、それぞれのいろいろな「違い」は「違い」としてあって良いだろうということなんです。「違い」は「違い」と認めながらも、何が共有できるのかという所の観点さえしっかり押さえておいて、共有できる部分を少しでも増やしていく。或いは、自分と人との出会いの中で、「自分が正しい」と押しつけるのではなくて、自分をいつでも変えていけるだけのものを持っておく。そんな運動のつながりみたいなことが大切だと思います。それだけでは勿論ダメだし、でも、「違い」は「違い」として認めながら共通性を拡大していく、それは、いろんな組織の運動にも必要なのではないかと感じています。

いろんな運動の歴史があります。僕は僕なりの七〇年代の総括をして、自分の運動を進めているわけです。ですから、いろんな立場の違いは違いとしてあって良いし、その違いを認めた上でいかに共同のもの、共通のものを作っていくのかということだと思っています。

② 共感をできる限り広める中で

一番最初の話とここで結びつく所があります。日本の左翼の場合、多くの場合には、観念を逆立ちさせると言うか、自分たちの思い込みの集団を沢山増やしていくという、長い「伝統」があるように思えて仕方がありません。例えば、僕たちがぶちあたった軍事という問題。これは、革命或いは運動が一つの状況を迎えた時には、必然的に必要な領域となります。だからこそ、それはより広範な素直に共感に得るような大衆運動の上にしか存在できない。中途半端な闘いでは、生き延びることは絶対にできないと考えています。幾つかの違いを認め、共通性を拡大していくという大きな流れの中でしか、そういう存在も生き延びることはできないと、僕は考えるわけです。

ところが最近の傾向を見れば、まだまだ、本当に変革すべき対象として現在の国家権力が把握されているとは言えないと思います。そうではなく、自分たちの頭の中で解釈した世界観に基づいて幾つかの集団が存在し、その集団がその世界観に基づいて中間的な権力との闘いを展開するという、中途半端なところがあると思います。全ての対象をじっと把握して、与えられた課題は真剣に

考えなければなりません。しかし、真剣に考えるとは思いません。絶対と一緒にやり、一緒にやる中で、共に日本のリアルな変革の興味みたいなことを考えていくことが非常に大切なんだと思います。

僕たちは、非常にマンガチックであったけれども、六〇年代の後半に権力闘争というものをギリギリの闘いの中で垣間見ようと思いました。そういう体験を踏まえて言えば、実は平和な時代でも同じような質の闘いは不断に続いている、と思うのです。それは、本当に毎日の闘いの中に、そういうことが実感できるわけで、何も銃を持ってやり合わなくても、日常の中にあると思っっています。本当に自分たちが具体的に権力の奪取を考え、権力を地域で作りに出す準備をしていく、そういう運動を考えるならば、どういう働き掛けや準備が必要かは自ずと判ってくるのではないかと思います。

本当に素直に共感していく、現実の矛盾に対する闘いに共感していく。現実の矛盾を打破する時に、共感する層をできる限り拡大することが本当に大事だと思います。中途半端にその場でムリをするよりは、できるだけ共感をできる限り広め、キチンと準備すべきことは準備する。

観念であれこれ言うのではなくて、当然必要になることはキチンと準備に入る。そう考えれば考えるほど、本

当に団結が大事だし、仲間が大事だし、違いがあっても一緒にやれて、お互いが本当に生き生きできる。ここが最も大事なことでと思います。

軍事という問題で言えば、決意をして軍事をやるんではない、愚の骨頂だと思います。そんな軍事はやるべきではないし、やってはいけません。ごく普通に当たり前に、勝利の確信を持って一つ一つ敵の弱さを突いていくような軍事でないと、生き延びれないと思います。

そして、ごく普通の闘っている人達がそういう所を闘えるような運動・組織を作っていくと考えると、人が人を変えていく、人と人との関係が変わっていくという確信を持ちながら、共に活動し、共に語り、見解の違いは違いとして考えながら共に闘っていく中で、確信を持ってそういうことができる時代を作っていきたいと思えます。

III 党内闘争と団結について

① 人民が歴史を動かす主体

「党内闘争は党を生き生きとさせる」という念だけでは、なかなか上手くいかないということを、僕たちは体験してきました。

党と言ったところで偉いわけでも何でもないし、党と言わないから偉くないわけでもない。現実の闘いにはいろんな段階があるし、いろんな所にいます。また、何も自分の所が一番でなければならぬということもない。いろんなグループがいろんな形で共同の闘いを進めながら、相互に何が違い、何が同じかを確認しながら運動がドンドン広がっていければ、良いんではないかと思えます。そういう中で、歴史的に僕たちが経験し、また長い革命運動の中で体験してきた幾つかのことを解決できる中味が、共通に持てるようになれば一番だと最近を考えています。

僕たちは六〇年代後半の党内闘争に失敗して、プリントを解体してしまいました。また「連赤」の問題では、僕たちは非常に決定的な敗北をしました。僕たちは、何故こういう経過を辿らざるを得なかったのかという一定の歴史的な位置と、その限界性は何かということを確認に

次の世代に伝えたいと思います。それが僕たちの任務だと思っと思っています。

綱領について乱暴な言い方をすれば、あの時期にはそれがあったところで結局は対応できなかったのではないかと思います。僕が「正義性」とか「共感」と言う、自国の人民の解放と国際的連帯の現実性の課題との結合とかについて、皆が考えてきたことや自分たちの団結の質をスツとばして、あるべき綱領というのはおかしいと思っっています。例えば、綱領を作って分派はしないと確認したけど、やっぱり分派したりします。厭味ではなく、こんなことは判ってた筈だと僕は思うんです。『これを勉強すれば、共産主義者』といったところで、そういうのは革共同とどこが違うのかと思っいます。その時の苦闘をスツとばして非常に安易な傾向だと思っいます。

あるべき共産主義・綱領などというのは、現実の闘いの中からしか生まれてこないわけですから、現実をありのままに見て、それを自分たちと対象の関係として整理し、対象の矛盾・問題を自分たちとの関係でもう一度再構成していく。それが、一番の弁証法ではないかと思っんです。

また僕は、ただ相手を批判することによって自分たち

② 「第三世界」の民族解放闘争に学ぶこと

僕は、いま第三世界の階級闘争を勉強しながら、いろんな違いがあってもしっかりと団結した幾つかのグループが存在し得ると思っっています。それぞれのグループが、いろんな個別の闘いのなかから一つのことに登り詰めていく、そういう準備を幾つかのグループができていたら、それは闘いの中で一緒に合同して闘えるはずだと思っっています。

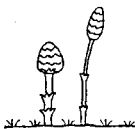
多くの革命闘争を見ると、抑圧の構造がかなり明確にあります。その抑圧を突破するためには、どこまで行きつければ良いのか、革命というなかで、社会主義・共産主義、或いは徹底した非公然組織ということが提起されていきます。最初は少数から運動が始まっっている例は、いたるところの国の階級闘争の歴史の中で見る事ができます。少数から始まっっているけれど、「正義性」という点では非常にハッキリしています。では、僕たちの闘争も民衆への正義性という点では、ハッキリしていたか。当時いくつかの課題を抱えていたと思っいます。その最大の課題は、単に国際的な連帯と言うだけでは、この正義性を表現しきれない側面があるということ。それは、自分たちの解放の問題と国際的な連帯という問題がつか

の正当性を主張するという傾向は、日本の左翼の最も悪い所だと思っっています。他と違うことを言わないと自分たちの立場が無い、そんなことを繰り返してきた自分たちの歴史を恥ずかしいと思っいます。そんな所には問題の核心は一つもありません。人民の運動と闘いの中に、一切の矛盾と一切の真理があるわけで、人民と共に闘いながら、その闘いを前進させていくことを僕たちは歴史的な体験から学んできたはず。です。

弁証法の「対立物の統一」という問題で言えば、幾つかに分離しながらも実は統一されている、統一されているように見えながらも実は分離を含んでいる、というようなことだと思っいます。言葉のロジックではなくて、そういうことも見据えていけるような僕たちの力を着実に準備していきたくと思っいます。一人一人の共感性を大事にする。昨日まで違った人が仲間になる。意見が違う人ほど、逆に意見の共通性がある。そういうことを大事にしながら、且つ全体がどう変わっていくか、自分たちが何を準備しなければならぬかをキチンと見据えていける。そういう伝統みたいなものを日本の中に作っっていくたいと思っいます。

がらないと、根底的な所まではなかなか行かないということ。そこで感じたのは、正義性という意味でいけば、自分たちが解放されていくことと国際的な現実＝連帯の問題を、どこでつながった問題として形成していくのかということ。この問題については、当時闘った人達はいろいろと悩み抜いたと思っいます。

これは、僕などは第三世界から学びたい。最近では二カラグアだとかエルサルバドルとか、どこでもそうなんです。幾つかのそういう組織の統一戦線というか、連合体として作られています。昔のように、中国共産党だけだったりするようなものではなくて、幾つかのグループがあっって共同して組織や団結が作られています。そういうものが作られていく中味、そういうものがどういう風にして作られてきたのか、少数から始めた彼らがどのようにして革命まで辿り着くことができたのか、ということ。僕たち自身がもう少し学んでも良い時代だな、と思っっています。



いま

何が求められているのか、

私の問題意識

——上坂吉吉著

(三里塚闘争に連帯する会)

こう見たところ、三里塚や白保なんかで知っている顔が多いようですね。

でも今日は、マルクス主義とか、左翼、党、革命みたいな話をせえというのですが、今までそんな問題で皆さんと話合ったことがない。で、皆さんがどんな問題意識をもっているのかよくわかりません。だからどうい話をしようか迷っているんです。でも、なにか勉強したいところとして集まっておられるわけだから、その勉強ということから考えてみましょう。人間というのは誰でもその一生をつうじて、いつも右しようか左しようかという選択、大きいことから小さなことまで、無数の選択に直面しながら生きていくでしょう。その選択に

あたって、どっちの道をとるか、その判断の根拠、確信があるでしょう。それをつかみたくて勉強するんだと思いますよ。したがって、それには自分の生き方がかかっているわけだから、他人に教えてもらうんじゃなく、自分で考えないかん。自分で考える材料として、本を読むとか人の話を聞くとかするのはいい。しかし、それは材料であって最後の判断は自分でするしかない。そのため勉強だと思えますよ。単にいろんなことを知りたいとか、趣味は読書ですなんていうんじゃないかね。そこで、今僕はこうやって革命というか、この世の中を根本から変えたいというようなことを考えて自分の生き方を決めているわけですが、その僕が、自分なり世の中なりにいってどんなことを考えているか、そんな所からとりとめない話をします。

最後のところへんで今日のテーマ、マルクス主義、党、革命なんていう本題にまで入れるのかどうか、よくわかりませんがまあやってみましょう。

1 知る・わかる・感じる

そこですまず最初に、われわれの勉強と実践との結びつきということを考えて見たいと思います。グラムシを勉強したところのある人は、知っているでしょうが、彼が強調していることでは、知っています。(板書) 知る↓わかる↓感じる。その逆、感じる↓わかる↓知る。最初の知る↓…のほうはインテリ・知識人の場合、後のほう、感じる↓…というのが、民衆というかな、一般の人達の場合なんです。もっとも知識人とか一般民衆とかいってもね、これは知識人、これは一般の人とはっきり分かれているんじゃないかと、一人の人間の中でもこういう二通りの物事の理解の仕方があるわけね。

一般の民衆、普通の人というのは感じることから始まる。「これ、なんかおかしい」とか、「すごいネ」とか、そしてそのうち、ただ感じていただけじゃなくてわかってくるんですね。理屈が、「なるほどこういうことか」とかね。

しかし、わかったという段階から知る・知識という段階になるにはもう少し勉強せんといかん。それで、感じるという段階では、ただむやみやたらと動いたりするわ

けやけど、わかるという段階になるともう少し利口になる。それがさらに知るとい段階、これがなんで必要かというところ、自分の考えを広めたり、多くの人にもそれを理解させる、難しくいうと普遍化の作業。これは知識がないとできない。逆に知識人の場合、とても普遍的で抽象的なことを聞いたり読んだりして知識として知る段階、それがもうちょっと具体的な物事、経験とかに結びつけてわかるという段階、だいたいまあ一般に知識人といわれる人々の本から得た知識というのはこころへんで止まってしまふ。知る段階で止まっている人もいる。止まっているくせに、わかった、感じたように思っている人もいる。まあだいたいわかるあたりで止まって、なかなか感じるどころまでゆかない。だから、知識人というか指導者、インテリ、そういう人達と民衆の運動がなかなか結びつかない。だいたい知るあたりで止まっていて物を言うから反発を買う。わかるあたりやったら、「あの人はわりにわかってくれる、けど自分とは違う」ところなるわけでしょう。ところが運動というのはただ頭で理解しただけじゃ動かないのですね。感じるという段階が何故必要かといえれば、知識は普遍化の役を果たすんだけど感じるのほうにはエネルギーがふくまれてくる。感じた

ことの中にあるパッション、つまり、苦しめられたら返したい、愉快なことがあれば踊りたい、とこうなるからエネルギーがそこにはある。しかしこれ、ただ感じただけのエネルギー、パッションだけで動いていると、向こうが策略をねってきたらいつべんにだまされてちゃうとか、一時的で永續きしないとかで終わってしまう。そうならないために、わかるという段階、さらに普遍化できる知識として他人にも伝え、自分の確信も深まるというようにせねばならない。知識人と普通の人という二種類の人間がいるのではなく、われわれ一人の人間のなかにそういう二種類の作用が働いているということを知り解しておく、すると勉強する場合も、まず本を読んだ、そして理解した、しかし本当にわかっているんだらうかということとは、もうちょっと現実とつきあわせんとわからん。自分の中からワットとエネルギーが出てきて、これはどうしてもやらなあかんと、身体が動くところまで湧くかどうか問題やからね。だから自分の知識というものが、本から得た知識をそうやって検証してゆくってことが大事です。とくに運動やろうなんて人はいわゆる一般の人とは違うわけでしょう。活動家、それから指導者、そういう人はよっぽど気をつけないと民衆と一緒になれ

2 無知ということ

勉強しないってことは無知ということですよ。
無知ってことはただ物をしらないというに止まらない。
犯罪的なことだってありますよ。

これはたまたま戦争中の満蒙開拓団の話がある本で読んでみればね。当時、日本の貧しかった農村の二・三男対策ということで多勢の人が中国東北部(当時満州と呼んだ)に移住していった。軍隊に守られての侵略なんだけど、行った人達に侵略という意識がほとんどない。連れてゆかれた所にはきれいに耕された畑と、ちゃんと人の住める家があって、そこに全部入れられたんだそうです。ところがね、そういうよく耕された土地と人がす

めるような家だから、自分達が行く前に、誰かがそこに住み、誰かがその畑を耕していたはずだということは同じ百姓だからすぐわかるでしょう。ところが、そこにいくまでどう教えられてきたのか知らないが、彼等の考えは、畑をとられ、家を追い出された中国人達の身の上におよばなかった。もし仮にそれを考えたとしても、そのことに何の痛痒も感じなかった。そういう人達を追い出して自分達が入ったんだということにね。これは一

ない。知ったとか、わかったとかの段階で物を言うからね。エネルギーというのは「知る」とこからじゃなく、「感じる」ってとこにあるんだから、ここが本当に爆発するってことでなければ運動にはならないですからね。僕が活動に入った頃、戦後すぐの共産党の中でですけどね、お互いを教条主義者、経験主義者と非難しあう二つの流れがあった。これがね、五十年の大分裂の時にも大きく影響していると思いますよ。つまり「あいつら理屈ばかりか言うたってちょっとも動かへんやないか」「あいつらちょっとも本も読まん」と、どうしようもない経験主義者や」というわけです。こういうのは両方ともいかにのですわ。こういうと怒られるかも知れんけど、今頃の若い人、やっぱり勉強しないですね。本を読まん。実際身体動かして何かやるの大事やけど、やっぱり勉強をしつかりせん。今のこの複雑になった世の中、価値感もなにも、わけのわからんことになっているこの社会で、自分の生き方を選択するというのは容易じゃない。自分の生き方どころか、他人と一緒に社会の行き方まで選択するなんてとてもじゃない。

体どうしたことか、無知というか、想像力の貧困、戦前の軍国主義教育の結果といえればそれまでだが、これは非常に恐ろしいことです。

そして広い民衆レベルでそういう状態だったのです。ところがそんなことは昔だけじゃなくて今も同じですよ。三里塚の関係で話しますけど、今成田空港を使ってマレーシアから串カツが沢山輸入されています。現地の農家に飼わせた鶏を若い娘さんや主婦達がさばいて串刺しにし、こっちは油にはうりこんだら出来上がりという状態に入ってくるんですね。



この間テレビでも写していました。そこら辺の一杯飲み屋でわれわれもそれを喰っているかも知れん。知らなければこれだけの串カツですよ。だけどの串カツ一本の中にマレーシアと日本の関係やら、成田空港の役割やら、農業問題やら一杯あるわけなんですけど、知らなければそれだけのことですよ。知らないってことは、ただ自分が無知だということじゃなくて犯罪的ですらあると言ったのはこのことです。そういうことを自覚してもっともっと勉強したい、ただここに集まっているような一部の活動家が勉強するってことじゃなくて、民衆全体が勉強しなきゃいかん。おそらく日本人ほど世界で起っていることや日本の立場について、無知な状態におかれている国民はいないのじゃないですか。

3 進歩史観について

そこで、世の中のことを勉強する上で一つ問題を出して見たい。進歩史観批判とでも言いましょうか、今まで左翼の人達から近代化論者まで、また民衆全体もなんとなくそうなんですけど、世の中は昔の遅れた状態から進んだ社会へとむかい、人間も社会経済の発展とともに進歩

考えてくれんかと思う。二日や三日テレビが見られんかてそれがどないやいうんや。せっかくテレビ見んと済むんやから、もうちょっと本でも読むとか、じっくり物を考えるとかしたらどうや、何でやねん、二日三日でもビデオ借りてきてまで見てんだら辛抱でけんいうのは、テレビが止まったとたんにそういう状態になる人間の頭とか、習性とか、これは本当どないかなってしもとるんとちがうか、と僕は思った。だから、技術の進歩というのはたしかに昔の人が見たらびっくりして目を回すようなものがいっぱいある。それは一つの進歩だと思ふ。しかしその半面退化したものでいくつもある。つまり良かったもので、技術の進歩の中で無くなったものだって沢山ある。たとえば、奈良の東大寺に行ったことあるでしょう。あの入口の門にこんな大きな柱が何本も建っている。僕はあれを見上げていつも思うんです。あの柱、おそらくあの近所のごとかの山から伐りだした材木にちがいない。ここまででないして運んで来たのかわからんけど、さて運んで来た柱を組み立てるのに真っ直ぐに立てないかん、クレーンも何もない時どないしてあれ立てたんやろ、分からんでしょう。しかし建っとるのは事実やから、あれは奈良時代、もっと前かな、そう

しているという、なんとなくそういう感じ、確たる根拠は無いんだけど漠然とそう考えている。僕はそれを進歩史観と言っている。マルクス主義と言われているもの、本当にマルクスがどう考えていたかはわからないんだけど、それも進歩史観の色が濃いと思います。僕はこれを疑わなあかんと思うんです。とにかくいろいろあるけど昔より今の方がええやないか、世の中進んでるやないかという安易な見方が根強くある。そのため歴史の中での人間の役割とか、最初に選択ということをやったけど、その選択、歴史の中で人間がとる選択を重要視しない傾向がある。それはこの進歩史観に根があるんじゃないか、世の中は、そして人間ははたしてずっと進歩してきたと言えらんどうか、発達したと言ってる半面、退化していつてる面もあるんじゃないか、皆が常識的に考えていることを疑って見る必要がある。なんでそんなことを言うか、身近な例をあげて見ます。

Xデーで二・三日テレビが天皇漬けになった。それでビデオ屋が大繁盛したという話を聞いたでしょう。僕が知っている連中でもホラー映画たらいのござり借りてきて見とったのがある。「天皇漬けの放送がけしからん」というのはええんですわ。けどもうちよっと深う

いう技術、知識、ノウハウをもっていたんですね。前に瀬戸内海の島から大阪城まで大きな石をゴロゴロ押ししながら引っぱってくる実験をテレビでやってたけど。考えを見ると、クレーンとかいろいろの発明されてたしかに便利になったけど、人間の能力という点では、その当時持っていて、今は失ってしまったものが多いんじゃないかな。とくにそういう技術とか工学なんかの面だけじゃなく、文化、芸術などの面だつたらもつとそうじゃないか、今の時代の文化、昔の文化、どっちが優れているか、今のほうがいいとは必ずしも言えない。進歩ということについて、あまり根拠のない信仰を持たない方がいい。進歩した面もあるけど退化した面もたくさんある。

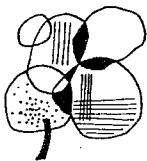
カラオケが今大流行してますけど、あれなんかも、ふだんは声のかぎりあげて歌を唄うなんて機会を奪われてしまっている現代人の、本来は健康な欲求を、どこかでかすめとって商売の材料にしてるんですわ。本当の健康な文化、昔の民謡とかはね、とり入れの歌、漁の歌、木樵の歌とか、どれでもほればれするような、そして人間本来の欲求の表現だったんですわ。変に技巧をこらした民謡歌手の唄っているようなもんじゃない。

今はレジャーとか何とか目先を楽しませるものはいや

というほどあるけど、本来の人間の可能性とか、人間の健康な欲求というのはそんなもんじゃないということも早く気付かんといけません。そりゃ若い人から見れば、

ワープロもよう打たん、車も運転できん僕なんかはどうしようもない頑固な昔もんかもしれんけど、しかし、便利利便の世の中で失ったものがいっぱいあるということ、そういうことを考えないと、世の中全体がゆがんでいると同時に、自分らもそれに合わせてゆがんでいるんだという自覚を持たんと世の中を変えることはできんと思う。

ちょっととりとめの話をしていきますけど、革命というの、この世の中を根本から変えようというわけだから、あまり安直に考えないで、本当に根本的に変えるっていうのはどういうことかって、そこから考えないと中途半端なこと考えてやったんでは、今まで全部失敗してるわけですからね。そこを言いたいのです。



4 レーニン・グラムシ

・私たち

まだ時間がありますね。本論の序の口ぐらいは入れそうですね。最初から選択という言葉は何回か使っています。歴史というものは、人間、人類と言ってもいいですが、その選択の積み重ねであるというのが私の理解です。もちろん、人間、人類がおかれている環境、物質的条件などの大きな制約というのはあるわけですが、その時、その時代の人間の選択によっては別の歴史もありえただろうというように考えるわけです。すくなくとも歴史、とくに革命運動の歴史をそういう観点から総括することが重要だと思っています。

一九一七年の革命の時のレーニンの理論、それ以前もそうだったと思うんですが、当時までの革命理論に一つの図式がありました。資本主義はその発達とともに、その社会を構成する主要な階級である労働者と資本家の対立がどんどん激化し、そしてそれはいつかの時期に破裂して、その後の社会は社会主義から共産主義に向かうというように。だから資本主義を廃止して社会主義に向かう革命というのは、当然資本主義が最も発達した国で起

こって、そこから社会主義に行くんやと、これは疑いのないものと考えられていた。ところが現実の歴史というのはその理論どおりにはならないで、ロシアという、まあ資本主義の発展という点からいえば中途半端な国で革命が起こった。ロシアではたしかに資本主義はかなり発達してました。とくに重工業部門では。しかし国民の圧倒的多数は農民であった。そういう国、資本主義が最も発達したとは言えない国で革命が起こっちゃったんですね。そこからそもそも物事の間違いというか、ややこしさが起こってくる。だけど一七年の革命の後でも、レーニンを含めて当時の指導者全体は、やっぱり先の公式にとらわれていた。資本主義の進んだ国で革命を起こして社会主義に行くんやという考えだった。ところがロシアみたいな中途半端な国で社会主義革命まで行っちゃった。それもむこうが弱くてと言ったら変だけど、相手の資本家階級がそんなに強くなかった。まあツァーというのはいぶんひどいことをして国民の恨みをかかってたから倒されてしまったけど、それにロシアの資本家が入れ代わってやるには力も準備もないという状態だった。そこでツァーを倒した後は当分資本家にまかせてということじゃなく、一気に労働者が権力を獲っちゃえということ

とで半年ほどヘゲモニー争いがあった後、十月革命になった。ただ、これはレーニンだけが考えて、他の連中はそんなことあかん言うとするのにやっちゃったみたいな所があるわけです。そこらへんのところレーニンという人は非常に実践的で、理論が合わんと理論そのものを変えてゆく大胆さがありましたから。

そういうことがあってロシアの革命が成功し、労働者階級が権力獲ったんですが、それでも、やっぱり資本主義の進んだ国、例えばドイツやフランスとかいう国で革命が成功しないと、ロシアの革命はもたないって考えてたんですね。永く、二二年頃までそう考えていたふしがあります。ところがドイツの革命が一九年に失敗しますね。その段階でレーニンはこれはえらいこっちゃと気付いたと思いますよ。でもはっきりとヨーロッパの革命は当分望めないという認識の上に立って、それでもなおロシアで生まれた労働者階級の権力、ソビエトの権力をどう守って社会主義から共産主義へと向かって行くか、それを真剣に考え出したのは二二年頃からだと思えます。いわゆる戦時共産主義からネップへの転換ですが、ここでも現実を見て理論を変えてゆくレーニンのやり方を学ばなあかんと思うんです。

いずれにせよ、レーニンはそのことを考え続けた。ヨーロッパの革命は当分遠のいた、見込みがないという状態のもとで、しかしロシアでは労働者が権力握っているという、しかもそのロシアは農民が圧倒的多数を占めている遅れた資本主義の国やった、そういう状態のもとでどうするか、それをレーニンは死ぬまで考え続けた。そこでネップという実践的な大方針転換をやった。だけどそれを発展させ、理論化して、マルクス以来予想していた革命とは違った革命がはじまったということ、それはどう発展させるべきかというところまで展開できないうちに死んでしまった。

そこからその後のソビエトの、というより世界的な革命運動の不幸が始まったわけです。レーニンは非常に優れて理論と実践を結びつけることのできる人だったからそこまで考えていたんですけど、他の指導者はまだそのことがわからなかった。とくにスターリンが悪かったんですが、レーニンの方針を後戻りさせてしまった。遅れた国で権力を握ったプロレタリアートが、圧倒的多数の農民と協力して社会主義をつくりあげてゆくにはどうしたらいいか、というところを逆に戻してしまって、二九年頃から強制的な農業集団化を始めた。戦時共産主義の

を独自に分析して、そこでの違った革命の方式があるんじゃないかと考えた人もいたんです。最初にちょっと紹介したグラムシです。グラムシは日本でも六十年代はじめに紹介されましたが、当時流行した構造改革の流れと結びつけられた為、正当な評価をうけませんでした。その後も熱心な研究者達の手でかなり紹介され、その研究はさかんに行われてきましたが、本格的な革命論、党論として実践的にとりあげられるのは今後のことでしょう。レーニンが死ぬ前に考えていたこと、またその後グラムシが獄中で考えていたこと、それはやっぱり、いま僕達が悩み考えあぐねていることとつながっていると思うんです。資本主義の遅れた国で成功した革命をどう社会主義につなげてゆくか、資本主義の進んだ国での革命は、二人ともそれにまだ答えを出さないうで死んでいます。しかもいま僕達が生きている国は、資本主義がうんと進んだ、というより進みすぎた国だから、おそらく過去に無いような一番難しい革命をやらなかん。マルクスはもとより、レーニンも、グラムシも、今みたいな資本主義の行き過ぎた状態を想像していませんからね。それは僕達が考えるしかない。しかも行き過ぎた資本主義というのはすでに地球や人間性の限界にぶつかるところまでき

反省からネップへというレーニンの思考を逆戻りさせ、しかも権力でもって上から強制的にやった。レーニンが農民に対して強制するようなことは絶対したらいかん、そんなことをしたら革命が自分の首を絞めるようなもんやと言っていたのにそれを強行した。しかも、さらに悪いことに、ロシアという遅れた国で成功した革命の例を、しかも社会主義へ向かう発展の処方箋はまだ出ていない、それどころか、間違った方向に進んだロシアの例を世界中の模範になるものとして理論化してしまった。こんなことがあって、その後の世界の革命運動というのは未だに混乱しているわけですね。もちろんそのことだけが原因じゃないですがね。とにかく、レーニンが死ぬ間際まで考え続けていたことが全然発展させられないまま、今日まで来てしまっているということですね。しかしその過程には中国の革命があったり、その後の革命は全部資本主義の遅れた国で起こっているから、マルクスが考えていた頃の予想とは全部違っているんです。ところが、その後の理論の発展というのがなくて、やっぱりロシア型の革命を全世界に及ぼすんだというところから抜けられなかったわけです。しかし、資本主義の進んだ国での革命、そこでの敵の在り方、味方の状態、そういうもの

で、深刻な環境問題や人間疎外をひきおこしていますからね。それだけに、このひどい世の中このままでは良くないと考える人はたくさんいるし、かなり根本的にやり変えないかんと思う人も増えています。それでそういうのは何もマルクス・レーニンを知っている左翼が考えるんじゃないくて、僕の感じで言うくと、深刻に考えてる人たちっていうのはエコロジストですね。エコロジイという視点、あの人達のほうがもう少し本質的なことを考えていますよ。左翼の人たちは、頭から入ってきた革命理論というものがあるから、やっぱり世の中変えると言うけど、まだ「エコロジイって何？」なんてまだ軽視している人がいますね。もっとも最近では悔い改めている人も多いですけどね。(笑)



時間がなくなって、党論などかんじんな話にまで入れないで、最後に最近僕もかかわっている社会主義懇談会の話をちょっとしておきましょう。

まだはじまったばかりですが、主体作りの試みとしてのこの懇談会、今までと違って、いいところは、おおっぴらにやろうとしていることです。今までだとね、党作りゆうのはコソコソやるでしょう。この指止まれの旗立てといてやる時はコソコソやる。そんなやり方を何べんもやってみんな失敗してきた。

だから今度はおおっぴらにやる。どんな旗立てるか、どんなもん作るかという中身の事も含めて公然と議論する。前にも新しい党作りの試みがあつて、その時にね、やっぱり綱領らしい文章と組織方針の二本立てが出てきましたよ。いわゆる今までのタイプの党作りに近いですね。だけどその二つだけじゃあかんでって僕は言っただけです。路線や組織方針というのはたしかに必要です。しかしそれよりも一番大事なのは人、つまり誰がやるんやということですよ。というのは皆過去にややこしい対立関係をもっていて、そのややこしい関係の寄り集まりみた

いなのが左翼やから、一体誰がやるんや、そいつが信用できるかできへんかっちゅう話があるからね。総括いろいろ、この言葉あんまり好きやないけど、それ含めて三本出してこんと成功しませんよって言ったんだね。それでやっぱり総括が不充分なところからけんかが始まりよつた。

だから今度の懇談会の場合ね、最初の連合言いよつた時にはまだコソコソ主義が残っていたけど、今度はおおっぴらになって来よるからね、僕はそれはいい事だと思ふ。おおっぴらにやって、そのややこしい関係もね、人にばっかし言うんやのうて、自分と自分の周辺にあるややこしい関係もだんだん解決する方向で参加してゆかなあかん、と思ひます。樂觀主義と言われるかも知らんけど、いつまでもこんな状態でええはずないし、みんなそのことわかってやっていることやから希望もつていいと思ひますよ。絶対成功するよなんて言われへんけど、失敗したらそれでそれが生きるようにしないとね。

——マルクス主義を考える交流合宿講演録——

発行：マルクス主義を考える交流合宿実行委員会

連絡先：尼崎住民ひろば

尼崎市東難波町5-8-12-202

☎06-482-8297

1989年11月 1日

¥300